

はじめまして。natuRable2 年生の大場です。

私は今回、初めてミクロネシアを訪れ、ミクロネシアの人々の温かさと海の美しさに魅了されました。すべてが新鮮な体験で日々刺激を受けていました。アンケート調査で出会う人々やホテルのオーナーから食べきれない量の食べ物をもらうことが多々ありました。食べ物のお礼に行ったらまた食べ物をもらったり、ホームパーティーと一緒にダンスをしたりとたくさんのおもてなしを受けました。また、きれいな海が生活圏のすぐ近くに位置し、いつでも行くことができる場所に魅力を感じました。波の穏やかな海の上で、静かな時間を過ごすのも泳ぐのもとても心休まる時間を過ごせました。日本にもこんな場所があればいいのと思いました。

今回の渡航ではいくつかの驚きもありました。鶏バトルを観戦して楽しんでいたことです。日本では鶏は食用として飼われていることが主だと思いますが、それをペットとして飼い、戦わせていました。椅子まで用意して観戦していて、日本では見られない光景に驚きました。また、海で亀をとってきて食べていたことも驚きでした。私も食べてみましたが、鶏肉の歯ごたえがあるバージョンのような感じでなかなか美味しかったです。

私からは各機関への訪問について書かせていただきます。

機関訪問では、現地のリアルな情報を集め、私たちの知識を深めることを目的に、在ミクロネシア日本国大使館、JICA、Department of Environment Climate Change and Emergency(以下、DECEM)、Office of Fisheries and Aquaculture、Environmental Protection Agency(以下 EPA)、Conservation Society of Pohnpei(以下、CSP)を訪問しました。

大使館へは表敬訪問をさせていただき、籠宮大使と経済・開発協力班の岡本書記官にお会いしました。私たちの活動の報告を行うとともに、現地の状況や大使館としての役割に関する話を伺いました。日本と現地の両方の専門機関を訪問することで、環境問題や国際支援に対する大使館と現地の人の認識の違いを知ることができました。

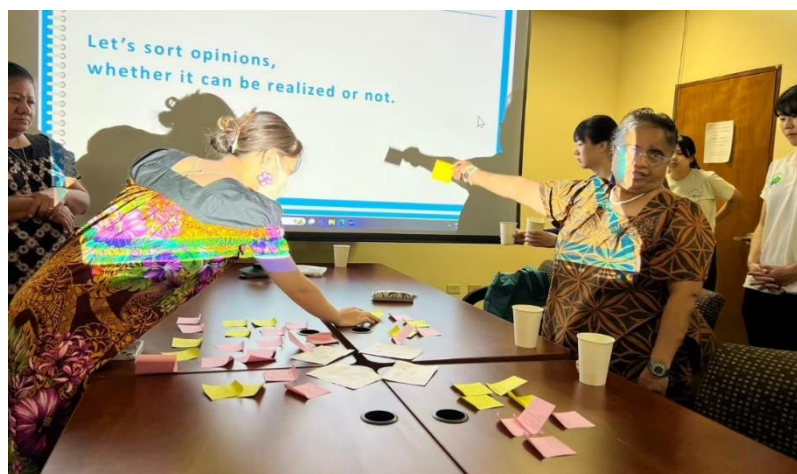
JICA では、現地に派遣されている職員の方や JICA が実施している奨学金などの教育支援や、現地での廃棄物処理について伺いました。これに加え、今年 1 月に起こったミクロネシアポンペイ島唯一の最終処分場である Dekehtik landfill (以下、ダンブサイト) での火災について詳しくお聞きしました。この火災は 1 月に起きたにも関わらず、現在も有毒ガスを排出しながら燃え続けています。火災の発生原因が堆積し

たごみの奥深くにあるため、なすすべがなく消化することができない現状にもどかしさを感じました。



ダンプサイトでの火災

DECEM は、日本語で環境・気候変動・危機管理省です。ここでは、「ミクロネシアにおけるデポジット制度をさらに良いものにするには何が必要か」というテーマにて、グループワークとディスカッションを行いました。私たちと DECEM の双方が取り組める内容をそれぞれ考え、意見交換を行いました。JICA で伺ったダンプサイトの話もあり、”日本の大学生”である自分たちに出来ることなどないのではないかという無力さを感じていました。しかしこの立場だからこそ活動の自由度が高く、出来ることが想像以上に多いことに気づかされ、今後の活動に新たな可能性を見出すことができました。



した。それと同時に、私たちに求められていること、役に立てることが数多くあると感じました。

EPA は、DECEM の下部組織であり、ポンペイ州の環境啓発活動を担う政治組織です。ここでは、政府機関が実際に現地で実施している環境教育や、リサイクル制度の現状、アルミ缶の CDL 制度 (Container Deposit Legislation) についてお聞きしました。また、最近始まった廃車の回収についても伺いました。ミクロネシアでは車を適切に廃棄するための設備が十分ではなく、道端に車が捨てられている光景を頻繁に目にします。これに対して EPA は回収を始め、なんと 3000 台もの廃車を回収したそうです。集めた車はインドネシアに輸出されています。しかし、輸出に必要な資金が足りず、満足な回収が出来ていない現状にあるそうです。先輩方も道端の車の数がだいぶ減ったと感嘆していました。

CSP は、EPA の環境養育分野を担い、環境保護と持続可能な開発の促進を目的とした環境系の NGO 団体です。環境教育を受けた人々が更なる教育を受けることが出来るような機会を設けていることや、残余年数が少なくなっているダンプサイトを拡張するためにマングローブ林の伐採が行われ、その結果として海の水質が悪くなっていることを伺いました。これを聞き、ミクロネシアの主要産業である水産業への影響を懸念しました。

Office of Fisheries and Aquaculture は、持続可能な漁業と養殖活動を通じて海洋生態系の健全性を改善し、経済的利益を確保することを目指しているミクロネシアポンペイ州、州政府の下部組織です。ここではミクロネシア特有の環境が海に与える影響や漁業者の教育普及活動についてお聞きしました。水の循環において、雨が降ることによって汚れた土や水、ごみなどが海へ流れてしまうことや、EPA や WCPFC¹ (Western Central Pacific Fisheries Comm) などほかのオフィスとも連携して教育を周知しているということを知ることができました。

私たちは、ダンプサイトにも実際に足を運びました。昨年と比べてごみの量が大幅に増え、ダンプサイトが拡張されていました。ダンプサイトの職員に話を聞くと、住民がゴミをダンプサイトに持ち込むようになったことで、道端のゴミは減少した一方でダンプサイトがゴミで溢れているとのことでした。ゴミを適切に捨てることで道端のゴミは減ったものの、次は捨てられたゴミをどのように処理していくのかという新

¹WCPFC は、中西部太平洋の高度回遊性魚類資源を保全・管理するために設立された国際的な組織。無規制の漁業や過剰な漁業活動への対策を講じ、関係国や地域と協力しながら、持続可能な漁業を目指しています。

たな問題が浮上していることに、問題の複雑さを痛感しました。また、JICAでお聞きしていた、今年一月に発生した火事の煙が未だに上っているのも目にしました。しかし、職員の方は何が原因で起きたのかは認知していないようでした。



ダンプサイト

現地で実際に見ることや機関訪問で話を聞くことにより、今までの漠然としたイメージから、はっきりとした、明瞭なイメージでミクロネシアを捉えなおすことができました。やはり、話や写真で見聞きしていたのとは違い、体感することでしかわからないことがたくさんありました。また、natuRable に所属し、環境教育活動に携わっていなければ、ミクロネシア自体も、ミクロネシアの美しい海や自然、そして現地の人の温かさを知ることはなかったと強く感じました。この地での活動を通じて、環境問題だけでなく、人と人とのつながりの大切さも深く感じました。また、活動を通して多くの人々に支えられていることを深く感じ、ミクロネシアの人々の笑顔や温かい人柄を守り続けたいと強く思いました。自分たちを勝手に狭い檻の中に入れずに、私たちだからできることを模索し、ミクロネシアの環境問題解決に尽力していきたいです。